

疏水フォーラム in 高梁川流域 2015 ～魂の故郷、高梁川の恵み再発見～

『疏水フォーラムin高梁川流域2015』（主催：高梁川東西用水組合、水土里ネット高梁川用水、疏水ネットワーク、全国水土里ネット）が、11月10日、岡山県倉敷市の芸文館で開催され、岡山県内外から401名が参加した。平成18年から始まった疏水フォーラムは今回で10回目。フォーラムでは、高梁川流域の歴史や重要性のみならず、疏水の恵みを将来に引き継ぐため、どのように保全活動を進めていくべきか、また、今後の活用方法、地域の在り方などについて考えるパネルディスカッションなどが行われた。11月11日には、東西用水の起点である酒津配水池や高梁川の水を利用した備南畑地かんがい地区などで現地研修会を開催した。



伊東香織氏による主催者挨拶
(疏水ネットワーク会長、高梁川東西用水組合管理者、倉敷市長)

【基調講演】

演題：疏水が織り成す地域共創の未来

講師：勝山 達郎 氏（農学博士、前田建設工業(株)常務理事）

世界から注目された“絆”の再生に向けて、疏水を核とした地域共創について講演。

概要は以下のとおり。



勝山達郎氏による基調講演

○ 世界から注目された日本の絆の原点は水利用共同体であり、限られた資源と厳しい自然環境の中で、長年の血と汗の積み重ねから 40 万キロメートルの水路網と水利慣行や村の共同社会が発生した。

○ 伝統的な村方式は同一の価値観を共有した地域社会の発展に大きく寄与してきた。そのメリットは、1) 意志決定が早い、2) 決定結果が円滑に動く、3) 助け合いが生まれ、4) 利益を皆で享受する、5) 限られた資源の有効利用、6) 法手続きによる強制根拠が有る、と

いうすばらしい方式ができています。

- 一方で、農業者が減少・高齢化し、農村の混住化や住民の価値観も多様化しているため、村方式は限界となり、新たな方式の検討が必要となってきた。
- 多様な主体が参加する共創的意志決定手法の開発や共通認識を醸成するスピーディな情報の共有手法の開発により、地域共通の理念を形成する場をつくり新たな地域リーダーを明確化することが必要である。
- 地域資源の管理から地域マネジメント化への変化が必要となる。地域の「宝」である昔懐かしい伝統、歴史、文化を組み入れて皆が語り合えるストーリーを作り、それを理念として共有する。
- 疏水の未来は、ユーザーへのサービスや水の価値、リスク管理を高める「水マネジメント」により新たな水価値を創造していくことが必要である。また、バッファ機能（調整池設置等）、スタビライザー機能（共創、ICT技術活用等）、水ナレッジ機能（発電等）を強化した未来志向の「スマート水利システム」構想を提唱する。
- 疏水や農業用施設を守っている土地改良区と地域が車の両輪として、広域水共創体を作ることが必要であり、それにより地域全体が疏水を核とした恵みを受け、地域が再生していく。

【講演】

演題：高梁川が地域に果たしてきた役割

講師：大久保 憲作 氏（（一社）高梁川流域学校代表理事、倉敷木材（株）代表取締役）

高梁川は地域社会全体の運命的共有物であり、高梁川を中心にこれからの産業、文化、伝統、暮らしの行く末を考えることが流域に住む住民の責務である。そのような理念に基づき、高梁川の恵みを受ける7市3町の「高梁川流域連盟」が農業をはじめ文化・産業・人材の交流の場として高梁川を「魂の故郷」として守り続けていることや、地域の風土そのものを教材とした「（一社）高梁川流域学校」の取り組み、GREENDAY（市民運動）の取り組みを講演。



大久保憲作氏による講演

【活動紹介】

演題：未来へつなごう！清らかな水と豊かな大地

講師：横山 佳弘 氏（水土里ネット高梁川用水管理課長）

水土里ネット高梁川用水が行っている、高梁川保護活動の具体的な取り組み（小学生を対象とした出前講座や森林学習のほかダム保全活動の実施）を紹介。



横山佳弘氏による講演

【パネルディスカッション】 テーマ：～魂の故郷、高梁川の恵み再発見～

座長：

林 良博 氏（国立科学博物館館長（疏水百選選定委員長））

パネラー：

勝山 達郎 氏（農学博士、前田建設工業（株）常務理事）

大久保憲作氏（（一社）高梁川流域学校代表理事、
倉敷木材（株）代表取締役）

三野 徹 氏（公立鳥取環境大学副学長）

パネルディスカッションは、疏水の恵みを将来に引き継ぐため、どのように保全活動を進めていくべきか、また、今後の活用方法、地域の在り方などについて、参加者も一体となって考える機会となるよう実施した。概要は以下のとおり。



座長の林良博氏

（林）

日本の疏水の源泉となっている河川は、広過ぎず、狭過ぎず、各地で多様な文化を生み出す源となっている。そして、地域のきずなを深めることは、日本の文化を、そして日本の何よりもすばらしい農業生産力を生み出してくれた疏水をどのように守っていくかという事に繋がっていく。

（三野）

過去に高梁川流域を調べてみたが、高梁川東西用水組合が無ければ、現在の倉敷周辺の様子は大きく変わっていたのではないかと思う。また、土地改良区は農村地域の「共・協」を担う組織であったが、それが分解・縮小していく中で、新しい「共・協」の受け皿として、変質あるいは発展しなければならない。それには多面的機能支払い活動や21世紀土地改良区創造運動が有効な手段の1つである。

(林)

疏水は、稲作が始まって以来連綿と続いてきた技術であるが、あまりにも当たり前の施設で一般の方が存在すら認識していない。もっと認識してもらうためには、少し方法を変えていく必要がある。疏水は、日本の動脈だけではなく毛細血管として、日本全体を美しくしているということを、多くの方に認識してもらう必要がある。

(大久保)

GREENDAY では、子ども達に自分たちの身近な川のBODパッ

クテストをしてもらった。自分の生活圏の中にある疏水の健康診断を行うことで、子ども達が興味を持ち、地域の人も川をきれいにするという責任が生まれ、「共同・協同」の精神も培われる。

(林)

教育手法は様々あるが、地域教育がある意味では一番大切である。高梁川流域連盟、あるいは高梁川流域学校での活動において、高梁川の流域を上流から下流まで1つに結び付けるという考えは、他地域の参考になる。

(勝山)

水利共同体で水を守るというのは、2,000年続けられ、水を守っている人たちには遺伝子のごとく引き継がれ、当たり前になっている。それが、近年、農村が多様化になり、当たり前になっているその遺伝子を他の人が認識してくれない。本来ならば誇りというものを忘れずにもっと訴えるべき。水を守る立場の人も意識改革が必要であり、そのためには、他団体等も一緒に行う多面的機能支払い活動や情報伝達手法の確立が有効である。将来、疏水を守っていくためには、徹底的にICTを勉強する必要がある。これを使わないと情報の発信・共有や共通理念は作れない。

(三野)

地域に組み込まれた仕組み、組織などの人と人との絆は、大変貴重な財産である。それが、実は多面的機能支払い活動の求めている、もう一つの農村地域の活用すべき財産であり、「共・協」の場として大事になっていく。農村地域には「共・協」という仕組みが必要である。

(林)

「共・協」は、まさに社会的共通資本の大きなベースの一つであり、そのための場所づくりを進めることが大事である。そして、この活動が疏水に関わっている人だけでなく、疏水の恵みを受けている人たちに、もっと分かりやすく「見える化」する事が必要である。

(勝山)

超高齢化社会やICT化など複雑化した社会において、リーダーはどうあるべきか。自分たちの常識とは全く違う常識をもった、今の時代の流れを追えるような人が必要ではないか。

(大久保)

この業界については、古い感覚で組織運営されているのではないかと感じている。「見える化」についても、誰が疏水や用水路の水量を決め、掃除をし、また公共的・共通的なものとして管理しているかなどがわからず、全く顔が見えてこないのは、やはり情報の発信量が足りない。川や疏水の名前も、もっと興味を引くような、例えば女性の名前やときめくような名前をつければどうだろうか。情報の発信を行い、あるいは水路のデザインを工夫するなど、皆が親しみを持てる疏水・水路を考えることが必要である。



パネラーの勝山氏、大久保氏、三野徹氏